

令和2年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2021

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

- 本書は、長岡市内で計画された開発工事に先立って実施した試掘・確認調査、開発工事中に実施した立会調査の報告である。
- 調査主体は長岡市教育委員会科学博物館である。
- 本文の執筆は、小林（1）、加藤（2）、鳥居（3・4）、山賀（5・6・7・8・9）、丸山（10・11）、で分担し、編集は小林が行った。
- 遺物番号は遺跡ごとの通し番号である。
- 土層柱状図における■は遺物包含層を示す。
- 出土遺物や写真及び測量図面などの記録類は長岡市教育委員会が保管している。
- 現地調査から本書の作成に至るまで多くの方から御協力、御教示を賜った。記して御礼を申し上げる（五十音順・敬称略）。

株式会社エヌ・アール・ケー総合企画、国営越後丘陵公園事務所、燕市教育委員会、寺泊高内集落、寺泊田尻集落、寺泊町輕井集落、東北電力ネットワーク株式会社新潟支社、信濃川左岸土地改良区、株式会社東横インアーキテクト、長岡市土木部道路建設課、長岡市土木部土木政策調整課、新潟県長岡地域振興局、西片貝町、日通不動産株式会社、三島郡北部土地改良区

目　　次

1 令和2年度長岡市内遺跡発掘調査の概要	1
2 寺泊（平野新）地区試掘調査	3
3 南邑遺跡確認調査	9
4 長岡城跡（城内町2丁目地区）確認調査	10
5 長岡西地区試掘調査	11
6 源氏川原遺跡確認調査	14
7 净円寺山遺跡確認調査	15
8 深沢地区試掘調査	16
9 宮本・大積地区試掘調査	18
10 西片貝上ノ山遺跡確認調査	19
11 村松町地区試掘調査	20



第1図　長岡市の位置



写真1　作業風景（深沢地区）

1 令和2年度長岡市内遺跡発掘調査の概要

令和2年度に長岡市教育委員会による遺跡の本発掘調査はなかったが、12月までに試掘・確認調査は11件実施された。このほか、諸開発に伴う立会調査を7件実施した。なお、年度中に1件の試掘・確認調査が予定されている。本発掘調査は平成21年度をピークに平成25年度まで横ばいに進んだが、以降徐々に減少し、近年では本発掘調査に至るケースはほとんどない。また、昨年度減少した試掘・確認調査の件数は、今年度には微増した。一方、立会調査件数は減少した。調査原因をみてみると、県営ほ場整備事業のほか、市道建設・拡幅などの公共工事や宅地造成や個人住宅建設、送電線鉄塔建設など多岐にわたる原因により調査がなされてきている。

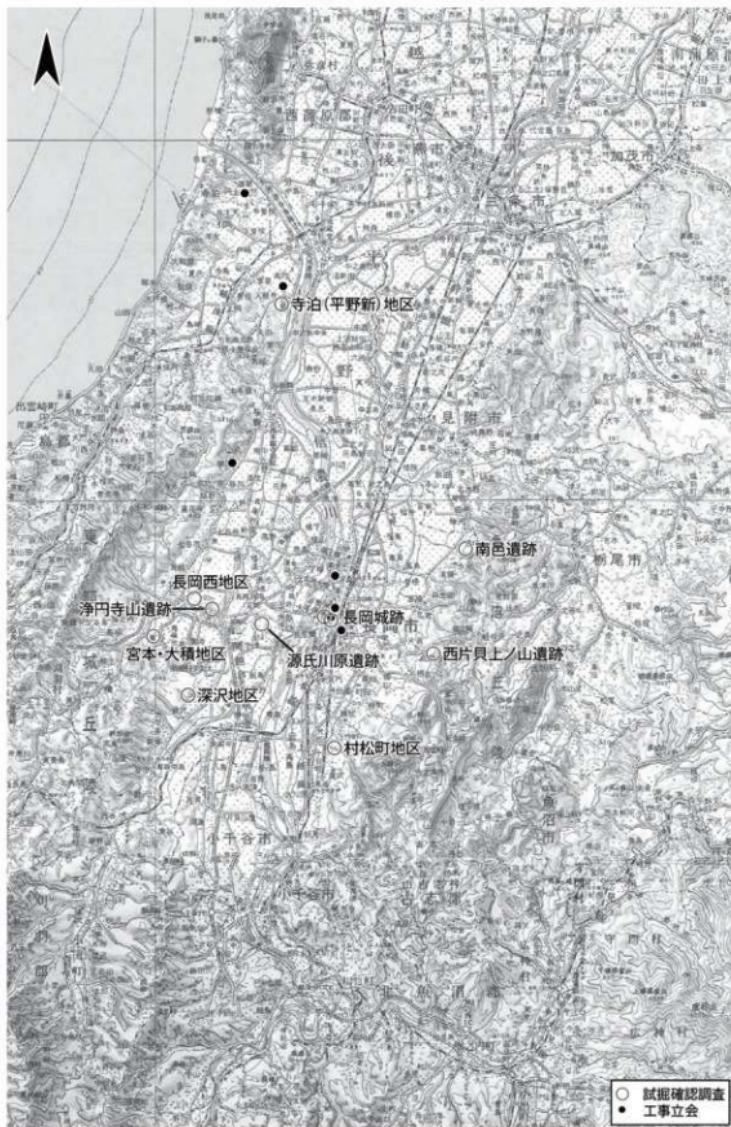
本年度実施した調査の主な結果について概観する。県営平野新地区画整理（経営体育成基盤整備）事業に伴う試掘調査では複数のビットと多数の土師器・須恵器が出土した。住居跡の検出には至らなかったが遺物の出土内容から古代の遺跡として城地免西遺跡と城地免東遺跡を登録した。今後、事業の進展によっては本調査が行われることになるであろう。また、同じく県営体育成基盤整備事業に係る試掘調査を行った長岡西地区では、周知の遺跡である鴨鳥遺跡の周辺からも遺物の出土がみられるなどの成果が見られた。また、深沢地区での試掘調査では土師器の小皿が多数出土するという特徴的な傾向が見られた。

その他の調査では遺物、遺構の検出は見られず、事業において影響がないことが確認されたため事業がすすめられることになった。

今年度の調査では、いくつかの調査で新たな遺跡が見つかったほか、埋没地形・地質などに関する多くの知見が得られるなど、今後の調査に役立つようなデータが蓄積された。

第1表 令和2年度長岡市内遺跡調査一覧（本書掲載の調査はゴシック体で示した）

地域	地 区	調査原因	結 果
寺泊（平野新）地区	県営ほ場整備事業	試掘 ビット・土師器・須恵器	
	寺泊町軽井地内	携帯電話電波等建設	立会 遺構・遺物なし
	稻場遺跡	県営ほ場整備事業	立会 遺構・遺物なし
与板	下稻場遺跡	急傾斜地崩壊対策事業	立会 遺構・遺物なし
長岡	南邑遺跡	市道改良	確認 遺構・遺物なし
	藏王堂城跡	看板立替	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡（関東町）	住宅解体	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡（大手通坂之上町地区）	市街地再開発	確認 墓跡・近世陶磁器
	長岡城跡（大手通2丁目）	下水道敷設	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡（台町2丁目）	住宅建設	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡（城内町2丁目）	市街地再開発	確認 溝跡・近世陶磁器
	長岡西地区	県営ほ場整備事業	試掘 土師器・須恵器・砥石
	源氏川原遺跡	市道改良	確認 遺構・遺物なし
	浄円寺山遺跡	宅地造成	確認 遺構・遺物なし
	深沢地区	公園整備	試掘 土師器
	宮本・大積地区	市道建設	試掘 遺構・遺物なし
	西片貝上ノ山遺跡	市道改良	確認 遺構・遺物なし
	村松町地区	送電線鉄塔建設	試掘 遺構・土師器



第2図 令和2年度調査位置図 (1/250,000)

2 寺泊（平野新）地区試掘調査

調査地	長岡市寺泊田尻525番地ほか	調査面積	423m ² (対象面積408,000m ²)
調査期間	令和2年9月30日～10月20日	調査担当	加藤由美子

調査に至る経緯 平成29年1月、新潟県長岡地域振興局農林振興部農村計画課（以下、「県振興局」）から長岡市教育委員会（以下、「市教委」）に、長岡市寺泊町軽井ほか地内における埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。これに対し市教委は、同地域には周知の遺跡が複数存在し未周知の遺跡の存在も考えられるため、開発に際しては事業着手前に埋蔵文化財の試掘調査が必要である旨を県振興局に回答した。令和元年7月、県振興局は事業実施が具体化した県営平野新地区区画整理（経営体育施設整備）事業の対象地について、市教委に試掘確認調査を依頼した。これを受け市教委は平野新地区は広大なため複数年で調査を行う計画を立て、県振興局もこれに同意した。令和2年10月、市教委は平野新地区における1年目の試掘調査を田尻・町軽井・高内地内で実施した。

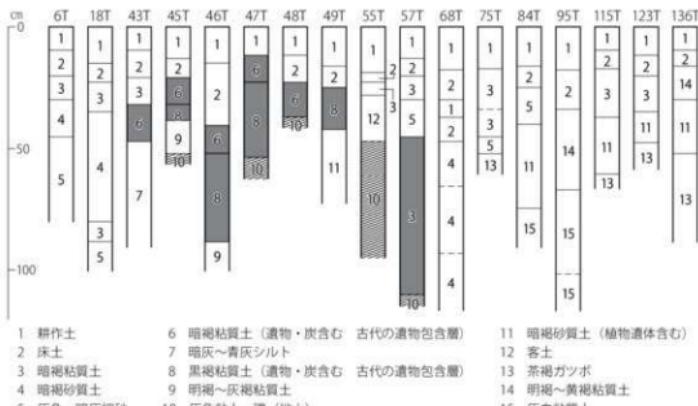
調査地の概要 平野新地区は長岡市の西部、寺泊地区に所在する（写真2・第3図）。長岡市寺泊の敦ヶ曾根・高内・万善寺・町軽井・入軽井・田尻・燕市の五千石・大川津（興野）の8集落からなり、地区が市境をまたぐため、試掘調査は長岡市・燕市両市がそれぞれの地籍を分担して実施している。地理的には越後平野の最南端に位置し、この東側で信濃川が大きく北へと流れを変える。集落は東頸城丘陵（東側丘陵）の裾部や信濃川の自然堤防上に形成され眼前の平野部を農耕地として利用するが、ここは古くから信濃川の洪水常襲地帯であり、一部を除いて一帯の土質は泥炭層が厚く堆積する軟弱地盤である。周知の遺跡には、寺泊大平遺跡（縄文）、屋鋪塚遺跡（弥生）、大久保古墳群（古墳）等がある。



写真2 調査地全景



第3図 調査位置図 (1/75,000)



第4図 土層柱状図 (1/20)

調査の結果 試掘調査に際し県振興局から提示された事業計画案には、削平を伴う田面調整が予定されていなかったため、排水路・パイプライン・揚水機場が予定される箇所にのみトレーンチを設定した。1.5m×2.0mの試掘トレーンチを全部で141か所設定した(第5～7図)。調査の結果、土層は大きく2つのタイプに分けられた(第4図)。東頸城丘陵の裾に位置する1～60・77・79～89トレーンチでは、総じて砂質土が厚く堆積しガツボ(植物遺体)層は全く認められない。対して、これ以外の大半のトレーンチでは耕作土直下に植物腐植土が堆積し、粘質土層などの安定した基盤層が検出できない軟弱な地盤である。

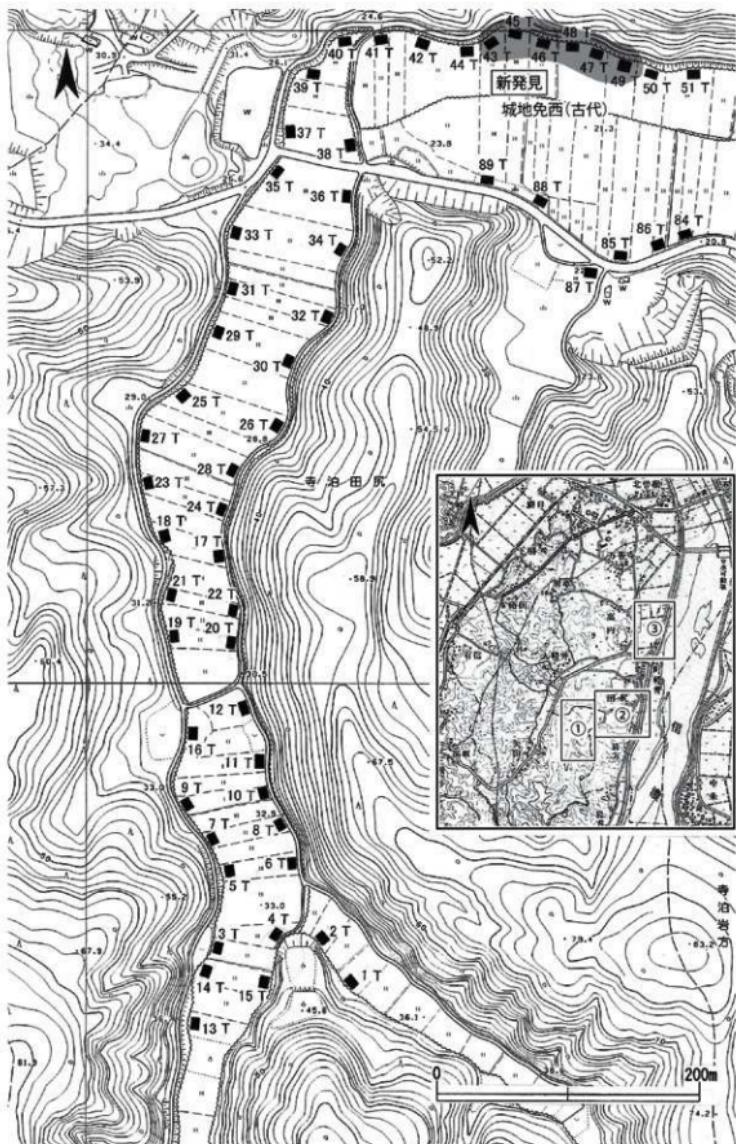
調査の結果、丘陵裾部の43・45～49トレーンチで古代の遺物包含層を検出し、土師器・須恵器が定量出土し、複数のピットを検出した。また、57トレーンチでも古代の遺物包含層を検出し、土師器が出土した。前者を城地免西遺跡、後者を城地免東遺跡として新遺跡に登録した。これらトレーンチの背後にある丘陵頂部には前期の古墳群である大久保古墳群が立地するため、調査当初は古墳時代の遺物の出土を予想していたが、それに反した結果となった。なおこの他に55トレーンチで弥生土器1点を表面採集している。遺物包含層が認められなかったため新遺跡としての登録は見送ったが、弥生土器の出土は当地域では珍しいため、今後の協議において上記2遺跡とあわせて注視すべき地点である。



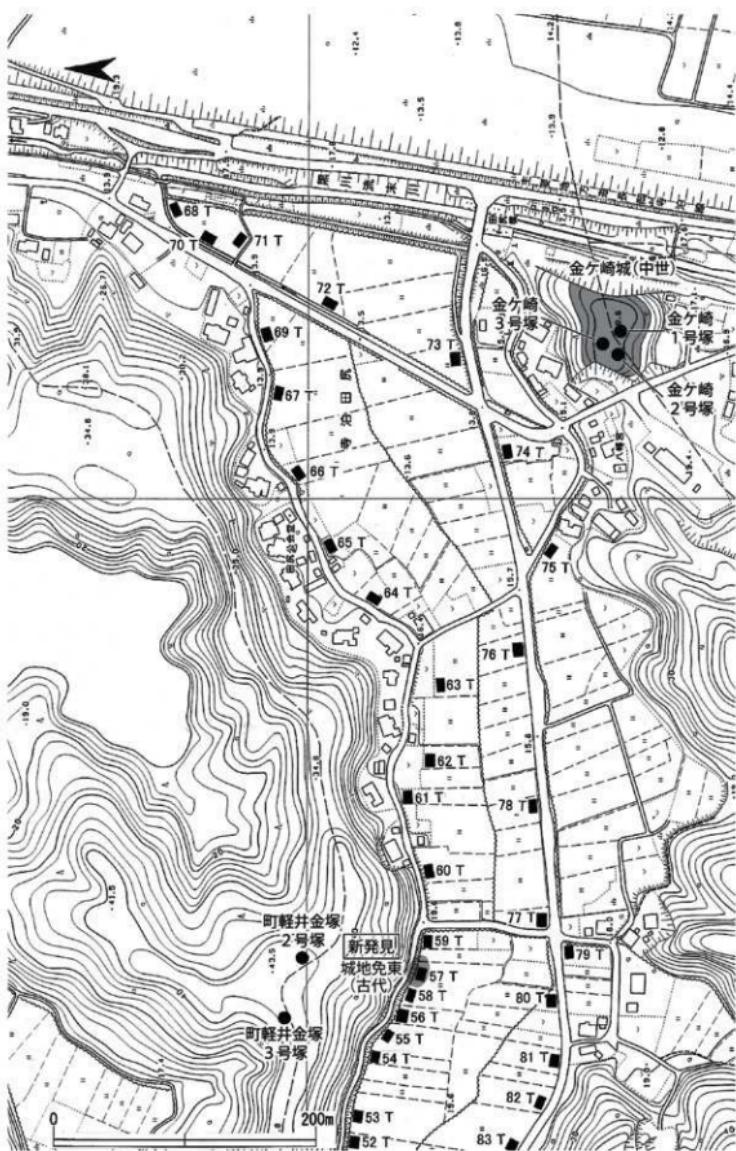
写真3 調査風景 (掘削)



写真4 調査風景 (埋戻し)



第5図 トレンチ配置図① (1/3,350)



第6図 トレンチ配置図② (1/3,350)



第7図 トレンチ配置図③ (1/3,350)

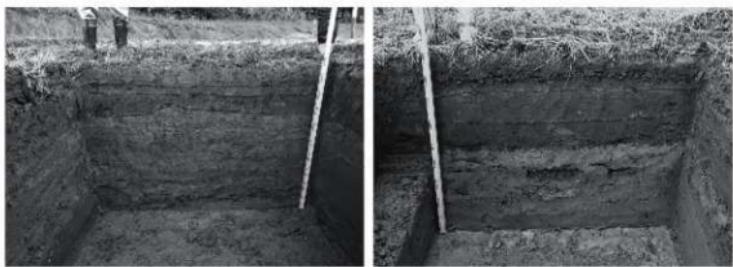


写真5 18トレンチ



写真6 43トレンチ



写真7 45トレンチ（遺構検出状況）



写真8 45トレンチ



写真9 47トレンチ



写真10 75トレンチ

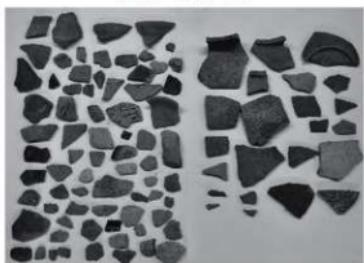


写真11 出土遺物（45トレンチ）

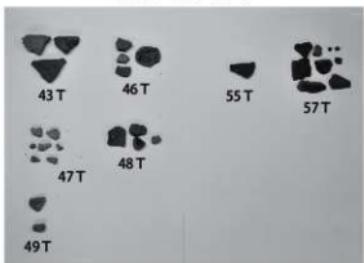


写真12 出土遺物（43・46～49・55・57トレンチ）

3 南邑遺跡確認調査

調査地	長岡市桂町	調査面積	25.0m ² (対象面積556.8m ²)
調査期間	令和2年8月25日・27日	調査担当	鳥居美栄

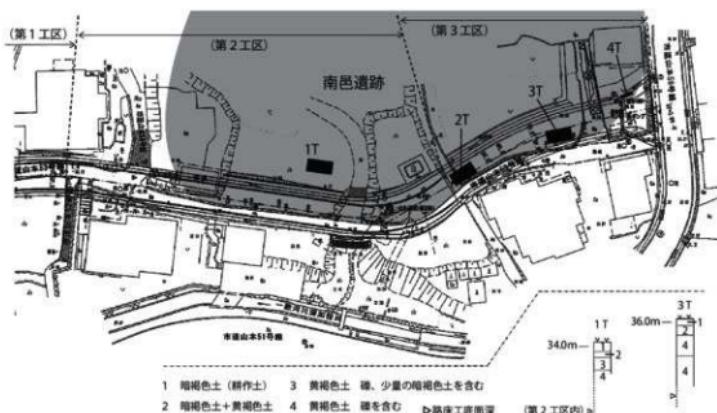
調査に至る経緯 令和2年8月、長岡市土木部道路建設課（以下、事業者という。）から長岡市教育委員会（以下、市教委という。）に、市道山本53号線改良工事により周知の遺跡の範囲内で着工したことが分かったとの連絡があった。工事計画地の第2・第3工区が南邑遺跡の範囲内であり、第2工区の路床工と路盤工を施工したとのことであったが、事前協議や確認調査を行っておらず、施工による遺跡への影響がどれくらいであるかは不明であった。市教委が現地を確認し、第2工区北側の畠地において縄文土器片16点と珠洲焼片1点を、10月着工予定の第3工区と第2工区の境付近で縄文土器片1点を採集した。縄文土器は中期末～後期初頭に位置付けられる。市教委は、新潟県教育庁文化行政課に無届工事の一報を入れ、併せて事業者と今後の対応について協議を行い、事業者の費用負担で確認調査を行うことになった。

調査地の概要 南邑遺跡は、東山丘陵西裾に営まれる桂町集落内の畠地にある縄文時代の遺跡である。標高は34~36m。遺跡は土石流段丘の縁辺に位置し、南側が崖状になっていて崖裾に浦加桂川が流れる。

調査結果 第2工区の北側の畠地に1T、第3工区の法線内に2~4Tの調査トレーナーを設定し、バックホウ及び人力で掘削を行った。2Tにおいて近世以降と時期不明の井戸跡各1基を検出、2Tの井戸跡から近世陶磁器、4Tで近代磁器が出土したが、中世以前の遺物・構造は確認されなかった。第2・第3工区ともに工事計画地内に遺跡は広がらないと見られる。工事実施は支障ないが慎重工事をするよう事業者に伝えた。



第8図 調査地位置図 (1/10,000)



第9図 トレーナー配置図 (1/750) 及び土層柱状図 (1/80)

4 長岡城跡（城内町2丁目地区）確認調査

調査地	長岡市城内町2丁目	調査面積	104.0m ² (対象面積1,457.39m ²)
調査期間	令和2年8月26日・27日	調査担当	鳥居美栄

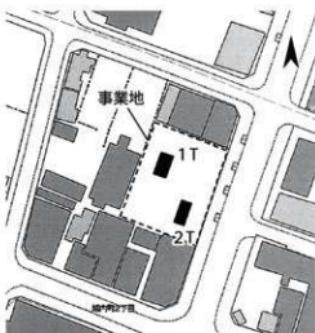
調査に至る経緯 令和元年8月、長岡市教育委員会（以下、市教委という。）に複数の開発業者が同一地点における埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて問合せに訪れた。日通不動産株式会社（以下、土地所有者という。）が当該地における再開発を検討し、その事前調査であった。その後、再開発は株式会社東横インアーキテクト（以下、事業者という。）によるビジネスホテル建設に決定した。市教委は、土地所有者及び事業者と協議を行い、令和2年度に遺跡の残存状況を確認するための確認調査を実施することになった。

調査地の概要 長岡城は、17世紀初頭から城及び城下町が築かれ、藩政の中心地として約250年間利用された。北越戊辰戦争により城と城下町は焼失し、その後の市街地利用などにより、現地表では土塁や堀は確認できない。調査地は、三の丸の北堀及びその北側の侍屋敷地にあたると推測されている。過去には土地所有者が倉庫などを設置し、現在は事業地全面がコインパーキングとして利用されている。

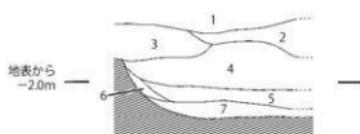
調査結果 侍屋敷地推定地に1T（5.7m×10m）、堀推定地に2T（4.7m×10m）を設定し、バックホウ及び人力で掘削を行った。1Tではコンクリート製建物基礎や整地土層などの下、深さ2m付近で近代の遺物は含まないが近世陶磁器片を含む暗灰～暗青灰色粘土の範囲があり、掘削断面で落込みを確認した。近世の溝跡であろうか。2Tではアスファルト舗装と路盤の碎石を除去したところ、その下層が土壤改良されていて掘削できず、調査を終了した。土壤改良の深度は不明であるが、これまでに長岡城の堀底面は地表から4～5m付近の深さで確認されており、本事業地内では堀跡下部は土壤改良の影響を受けずに残存している可能性がある。以上の状況から本発掘調査を要すると判断し、土地所有者及び事業者と協議をした結果、事業中止が決定した。



第10図 調査位置図 (1/10,000)



第11図 トレンチ配置図 (1/2,000)



上層：アスファルト舗装、路盤材、コンクリート基礎・薬石、填土層、炭化物層

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 古代整地層 | 5 暗灰色粘土 |
| 2 青灰色粘土 | 6 暗青灰色粘土 |
| 3 灰褐色～黄灰色粘土 | 7 暗青灰色粘土 |
| 4 暗青色粘土 | ※ 5～7から近世陶磁器出土 |
| ※ 1～4は近代陶磁器を含む。 | |

地山：青灰色粘土～シルト

第12図 遺構断面略図 (1/40)

5 長岡西地区試掘調査

調査地	長岡市白鳥町42番地 ほか	調査面積	612m ² (対象面積280,000m ²)
調査期間	令和2年9月29日～10月22日	調査担当	山賀和也

調査に至る経緯 平成30年1月10日、新潟県長岡地域振興局農林整備部(以下、事業者)から長岡市雲出町から関原町1丁目に広がる水田において経営体育成基盤整備事業が計画されていることから、埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。事業地には複数の遺跡の存在が知られており、また未発見の遺跡が存在する可能性があることから、試掘確認調査を実施し遺跡の有無や状況を把握する必要があることを伝えられた。これから詳細な設計を行うため、事前に遺跡の状況を把握し設計に反映してもらうこととした。対象範囲が、約56haと広大なため単年度では調査が終了しないことから、複数年にわたり調査を行うことで合意した。調査は、事業の進捗状況に合わせて令和2年から実施することとした。

調査地の概要 調査地は、信濃川左岸の東頸城丘陵から派生する丘陵の北側裾部の沖積地に位置している。曾地岬から流れる黒川が谷間を抜けて平野部に流れ出てくる位置でもある。今回の調査は事業対象地域の西半部分である。調査対象範囲内には、鴨鳥遺跡が位置している。鴨鳥遺跡は、古代から中世の遺物が採集されている。周辺の段丘上には、縄文時代中期中葉の竪穴式住居と弥生時代中期の再葬墓が出ている三ノ輪遺跡、縄文時代中期中葉の瓜割遺跡などが位置している。

調査の結果 調査は、事業地内に158か所のトレンチを設定し、バックホウと人力で慎重に掘削を行った。耕作土の下は、粘土層が堆積しているのが基本的な堆積であるが、腐植物が混ざる粘土層が堆積している部分もある。調査地の南側と東側にある段丘に近い位置は、黄褐色土層(ローム層)が堆積しているものと思われたが、確認できたのは93Tのみであった。

調査では遺構は確認されなかったが、17か所のトレンチで平安時代を中心とした遺物が出土した。129・137・139トレンチからは、少量であるが比較的まとまった量の遺物が出土している。その他のトレンチでは小片が1・2点の出土であった。出土遺物は、須恵器、土師器のほか砥石が1点出土している。わずかであるが、中世の珠洲焼も出土している。

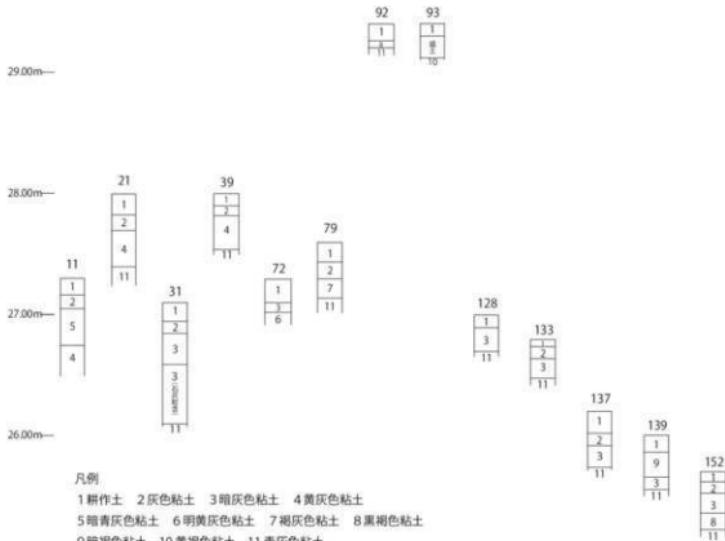
遺物がまとまって出土した地点は、鴨鳥遺跡の範囲に近接した位置である。遺物の表面採集状況から鴨鳥遺跡の範囲を設定したが、今回の調査の結果から129・137・139トレンチを中心とする範囲であることが明らかとなった。この調査結果をもとに事業者と遺跡の取扱いについて協議していく予定である。



第13図 調査位置図 (1/20,000)



第14図 トレンチ配置図 (1/5,000)



第15図 土層柱状図 (1/40)



写真13 21 T断面 (北から)



写真14 31 T断面 (北から)



写真15 137 T断面 (南から)



写真16 出土遺物

6 源氏川原遺跡確認調査

調査地 長岡市七日町590番地1 ほか 調査面積 35.0m² (対象面積5,000m²)
調査期間 令和2年4月8日 調査担当 山賀和也

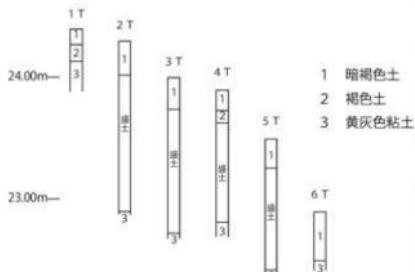
調査に至る経緯 源氏川原遺跡の範囲内において、市道日越37号線改良事業計画されていることが判明したため、令和元年7月17日に事業者である長岡市土木部道路建設課（以下、事業者）と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。計画地は遺跡の範囲内のため、遺跡の状況を把握し今後の協議に資する目的で確認調査が必要な旨を伝え、合意を得た。調査は、耕作が始まる前の春に実施することとした。

調査地の概要 調査地は信濃川左岸の東頭城丘陵から東に延びる低位段丘上の先端部に位置しており、標高は約25mである。東側には信濃川によって形成された冲積地が広がっており、比高差は約3mである。現在は、畑地となっている。遺跡は、平成4年の新潟県による悉皆調査によって発見され、須恵器が採集されている。平安時代に属するものと思われる。

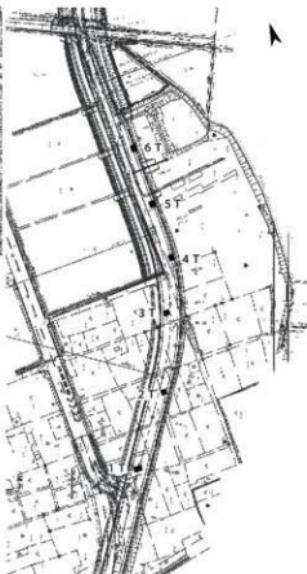
調査の結果 調査対象地にトレーニングを任意に6ヶ所設定し、バックホウ及び人力で掘削を行った。調査中に耕作者から過去に大規模な埋め立てがあったことを御教示いただいた。1~5Tでは、表土直下に80~100cmの盛土が確認された。1Tでは、当初盛土とは判断せずに記録したが、2T以降の堆積状況を見れば、1Tの2・3層は盛土であると思われる。6Tでは、ほかのトレーニングよりも1.5mほど低い位置に設置したため、盛土は確認されなかった。事業計画地に遺構・遺物は発見されなかったため、遺跡は存在しないと判断し、これ以上の調査は必要ないことを事業者に伝えた。



第16図 調査位置図 (1/20,000)



第17図 土層柱状図 (1/40)



第18図 トレーニング配置図 (1/2,000)

7 浄円寺山遺跡確認調査

調査地 長岡市上除町1969番 ほか
調査期間 令和2年4月2日

調査面積 45.7m² (対象面積5,434m²)
調査担当 山賀和也

調査に至る経緯 令和元年7月11日、株式会社エヌ・アール・ケー総合企画（以下、事業者）から宅地造成に係る埋蔵文化財の取扱いについての照会があった。事業地は、浄円寺山遺跡の範囲にかかる場所に位置している。また、地形が北に向かって傾斜しているため、造成に当たっては切土も計画されていた。そのため、確認調査を実施し遺跡の広がりを確認することとした。調査の時期は、令和2年春に着手することで合意した。

調査地の概要 調査地は信濃川左岸の河岸段丘上に位置しており、標高は約45mである。浄円寺山遺跡は、古くから遺物が採集されており、縄文時代後期及び古墳時代～中世の遺物が採集されている。しかし、周辺における過去の宅地造成により、遺跡の大部分は破壊されている可能性が高い。調査地は、開発されずに畠地として残された部分である。周辺の遺跡には、南側に縄文時代中期の転堂遺跡が位置し、北側の下がったところに中世の上除館跡が位置している。

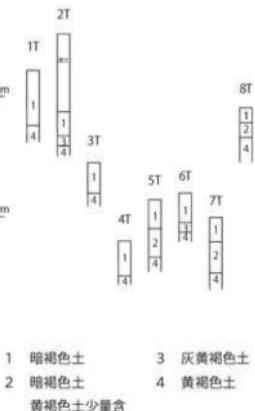
調査の結果 調査対象地にトレーニングを任意に8ヶ所設定し、バックホウ及び人力で掘削を行った。いずれのトレーニングも現地表面から-50cm程度で黄褐色土層に到達する。事業計画地に遺構・遺物は発見されなかったため、遺跡は存在しないと判断し、これ以上の調査は必要ないことを事業者に伝えた。



第19図 調査位置図 (1/20,000)



第20図 トレーニング配置図 (1/3,000)



第21図 土層柱状図 (1/40)

8 深沢地区試掘調査

調査地	長岡市上除町1969番 ほか	調査面積	45.7m ² (対象面積5,434m ²)
調査期間	令和2年4月2日	調査担当	山賀和也

調査に至る経緯 令和2年11月15日に市民から丘陵公園内で土器が採集できる地点の情報があり、翌16日に現地を確認を行った。そこでは、土器がまとまって出土している状態であり、遺跡が存在する可能性があった。そのため、長岡市教育委員会（以下、市教委）は11月26日に国営越後丘陵公園事務所（以下、事業者）と取扱いについて協議を行った。土器採集地点は、マウンテンバイクのコースとして整備する予定となっており、現在は森を伐採・抜根し簡単に整地した状態であるとのことであった。そのため、市教委は試掘調査を実施し、遺跡の有無を把握し今後の取扱いについて協議するよう依頼し、合意を得た。

調査地の概要 調査地は信濃川左岸の東頸城丘陵から派生する丘陵上に位置しており、比較的広い平坦面となっている。標高は約109mである。東側は崖になっており、その崖下には岩野原窯跡が位置している。調査地に近接する所では園路整備工事が行われており、その法線部分については平成28年度に調査を実施している。そのときの調査では岩野原窯跡を確認したのみでそのほかの地点では遺跡がないことを確認している。

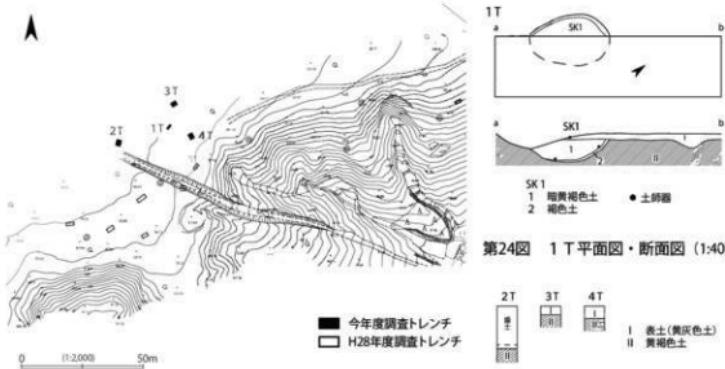
調査の結果 土器が出土している地点を中心に表土除去を行い、出土範囲および遺構の有無について精査した。土器はあまり広がらず狭い範囲にまとまって出土することが確認できたものの、遺構は不明確であった。また表土が薄く地山がすぐ出るような堆積状況であったため、土器が遺構内である可能性を考慮して1Tを設置し、断面で状況を確認することとした。その結果、断面から土坑を1基検出した（SK1）。SK1内の土器は数点であり、出土した多くの土器はSK1直上で出土している。遺物は、土師器の小皿がほとんどであり煮炊具が少量出土した。土師器小皿は、いくつか重ねて伏せた状態で出土したものもあった。次に遺跡の広がりを確認するため、2~4Tを設置し調査を行った。しかし、いずれのトレーナーも表土直下に黄褐色土が堆積しており、遺構・遺物ともに検出されなかった。

出土遺物 出土した遺物は、すべて1T及びその周辺からの出土である。土師器の小皿が主体であり、鍋などの煮炊具が数点含まれている。図示したのは、出土遺物の一部である。1~7は、土師器の小皿である。法量は大きく2つのグループに分けられる。口径7.8~8.6cm、底径4.9~6.1cmのグループ（1~5）と口径7.1~7.8cm、底径4.2~4.4cmのグループ（6, 7）である。すべてロクロ成形で底部の切り離しは回転糸切りである。8は、ロクロ成形の鍋で内面に横方向と斜め方向のカギ目が施されている。口縁は大きく「く」の字に外反し、端部は面取りされている。時期は、平安時代に所属するものと思われる。

まとめ 調査の結果、遺構・遺物を確認できたのは1Tのみであり、他のトレーナーでは確認できなかっただ。これを基に事業者と協議を行い、整備は盛上で実施されること、1T付近は調査を完了していることなどから、これ以上の調査は不要と判断した。また、今後新たに掘削する範囲が広がるようであれば調査が必要になることを伝えた。



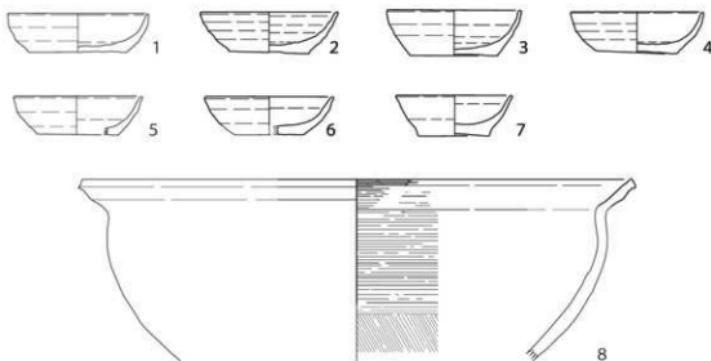
第22図 調査位置図 (1/20,000)



第24図 1T 平面図・断面図 (1:40)



第25図 土層柱状図 (1/40)



第26図 出土遺物実測図 (1 / 3)



写真17 遺物出土状況 (東から)

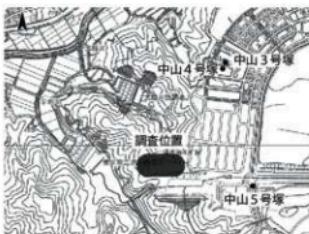
写真18 SK1断面 (東から)

9 宮本・大積地区試掘調査

調査地 長岡市宮木東方町
調査期間 令和2年4月27日

調査面積 8.7m² (対象面積15,000m²)
調査担当 山賀和也

調査に至る経緯 平成30年10月24日、長岡市教育委員会は、長岡市土木部土木政策調整課（以下、事業者）と宮木町長岡ニュータウン線建設事業に係る埋蔵文化財の取扱いについての協議を行った。当該道路は、ニュータウンから建設予定の大積スマートIC（仮称）への連絡道路として計画されている。事業地には、周知の遺跡は存在しないが、未発見の遺跡が存在する可能性があるため、試掘調査を実施し遺跡の有無を確認することとした。



第27図 調査位置図 (1/20,000)

調査地の概要 調査地は、信濃川左岸の東頭城丘陵に位置しており、標高は約118mである。現況は、森林である。調査地を含む一帯は、長岡ニュータウンの開発に伴い昭和51年に新潟県教育委員会によって遺跡分布調査が行われているが、遺跡は確認されなかつた。周辺には中山3・4・5号塚が位置しており、新潟県教育委員会によって3・4号塚が、長岡市教育委員会によって5号塚が発掘調査されており、中世後半から近世前半頃の築造と考えられる。現在は、その後の開発でいずれも埋滅している。

調査の結果 レンチは、丘陵頂上部の比較的平坦になっている場所に任意に2ヶ所設定し、人力で掘削を行った。調査の結果、遺構・遺物は発見されなかったため遺跡は存在しないと判断し、これ以上の調査は必要ないことを事業者に伝えた。



第28図 レンチ配置図 (1/2,000)

1T	2T	1 表土(黒色土)
2	1	2 黄灰色土
3	3	3 明黄褐色土

第29図 土層柱状図 (1/20)



写真19 1T完掘(東から)



写真20 2T完掘(西から)

10 西片貝上ノ山遺跡確認調査

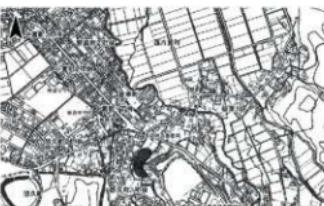
調査地 長岡市西片貝町字上ノ山1069他 調査面積 15m² (対象面積240m²)
調査期間 令和2年5月14日・15日 調査担当 丸山一昭

調査に至る経緯 令和元年7月に長岡市土木部道路建設課(以下、事業者という)から長岡市教育委員会に市道栖吉97号線改良工事計画地における埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて照会があり、その取扱いについて協議を行った。事業地は西片貝上ノ山遺跡の範囲内に位置することから、長岡市教育委員会は遺跡の内容を確認するための確認調査が必要であることを伝えた。

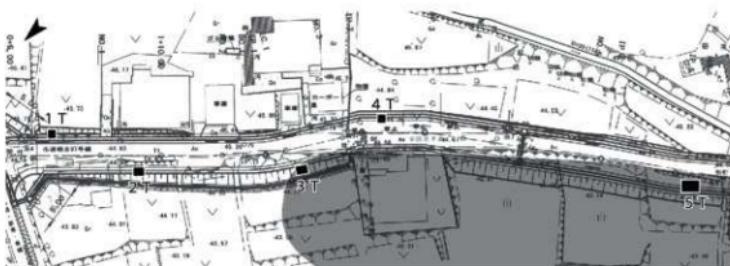
調査地の概要 西片貝上ノ山遺跡は東山丘陵西裾にある

西片貝町の緩斜面の畑地に広がり、奈良・平安時代の土師器、珠洲焼、近世陶器が採集されている。調査地は遺跡の東側縁辺部にあたり、標高は45m前後で現況は畑地や休耕地である。

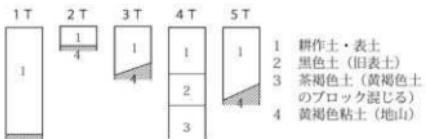
調査の結果 対象地内に2×1m前後の試掘トレンチを5ヶ所設け、人力によって掘削した。調査の結果、地表下15~50cmほどで黄褐色の地山となり、遺物包含層は確認されなかった。4T以外のトレンチはすべて宅地や畑地の造成により削平を受けていると考えられる。以上のことから、事業地内に遺構・遺物は存在しないと判断し、事業実施に支障はないことを事業者に伝えた。



第30図 調査位置図 (1/20,000)



第31図 トレンチ配置図 (1/800)



第32図 土層柱状図 (1/20)



写真21 調査前状況

11 村松町地区試掘調査

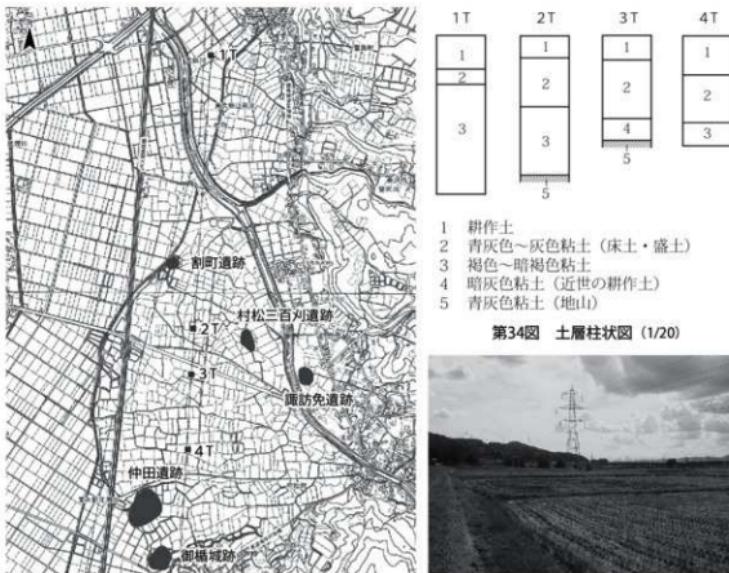
調査地 長岡市村松町ほか 調査面積 24m² (対象面積676m²)
調査期間 令和2年10月27日・28日 調査担当 丸山一昭

調査に至る経緯 令和2年7月に東北電力ネットワーク株式会社新潟支社(以下、事業者という。)から長岡市教育委員会に村松町地内の送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の照会があった。長岡市教育委員会は付近の遺跡分布状況を考慮し、事業用地4か所について試掘調査が必要であることを伝え、稲刈り後の10月後半に調査を実施することとなった。

調査地の概要 調査地は太田川右岸の沖積地(1T)と東山丘陵西裾に広がる扇状地(2~4T)である。扇頂では諏訪免遺跡、扇端では割町遺跡や仲田遺跡など古代の遺跡や中世の御橋城跡が分布している。調査地の2~4Tは扇尖にあたり、標高約35m前後である。現況は水田・休耕田である。

調査の結果 対象地内に2×3m前後の試掘トレンチを4か所設け、バックホウによって掘削した。調査の結果、遺構は確認されなかったが、3Tで土師器無台碗の底部1点が灰色粘土層(4層)から出土した。4層は盛土の2層直下にあり、近世の水田耕作土と考えられる。このことから、古代の遺物包含層が存在する可能性は低い。他のトレンチでは未分解の植物遺体を含む軟弱な暗褐色粘土(3層)が堆積しており、遺構・遺物ともに検出されなかった。以前は水はけの悪い湿地帯が広がっていたと考えられる。

以上のことから、対象地に遺跡は存在せず事業実施に支障はないことを事業者に伝えた。



第33図 トレンチ配置図 (1/20,000)

写真22 調査地近景



参考文献

寺泊町

1992 『寺泊町史』通史編上巻

長岡市

1992 『長岡市史』資料編Ⅰ考古

長岡市教育委員会

2018 『岩野原窯跡－国営越後丘陵公園園路整備事業に伴う確認調査報告書－』

長岡市史原始・古代史部会

1993 「長岡市山本地区で発見された遺跡と遺物－東山周辺域遺跡分布調査報告－」

『長岡市史研究』第4号 長岡市 15-30頁

中村孝三郎

1966 『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市立科学博物館

新潟県教育委員会、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 一之口遺跡東地区』

報告書抄録

ふりがな	れいむにねんどながおかしないいせきはつくちょうさほうこくしょ						
書名	令和2年度長岡市内遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	小林徹・加藤由美子・島崎美栄・丸山一昭・山賀和也						
編集機関	長岡市教育委員会						
所在地	〒940-0084 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号						
発行年月日	2021年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	調査期間	調査区域	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	東経			
じょうじめんのいせき 城跡免西遺跡	新潟県長岡市城跡免西1442他	152021	1498	373524 1384856	20200930 20201020	18.0m ²	試掘調査
じょうじめんのいせき 城跡免東遺跡	新潟県長岡市城跡免東1498他	152021	1499	373521 1384906	20200930 20201020	3.0m ²	試掘調査
じんめいせき 曲邑遺跡	新潟県長岡市曲邑148地	152021	308	372851 1385519	20200825 20200827	25.0m ²	確認調査
じんめいせき 井戸田城跡	新潟県長岡市城内町146地	152021	146	372656 1385111	20200826 20200807	104.0m ²	確認調査
じんめいせき 長岡城跡	新潟県長岡市城内町147地	152021	234	372630 1384813	20200408 20200408	35.0m ²	確認調査
じんめいせき 源氏城跡	新潟県長岡市七日町1690番地	152021	44	372710 1384654	20200402 20200402	45.7m ²	確認調査
じんめいせき 淨円寺山遺跡	新潟県長岡市上諏原1699番地	152021	352	372606 1385310	20200514 20200515	15.0m ²	確認調査
ふりがな	種別	主な時代	主な構造	主な遺物		特記事項	
所取遺跡名							
じょうじめんのいせき 城跡免西遺跡	遺物包含地	古代	ピット	須恵器・土師器		なし	
じょうじめんのいせき 城跡免東遺跡	遺物包含地	古代	なし	土師器		なし	
じんめいせき 曲邑遺跡	遺物包含地	古文	なし	近世陶磁器、近代磁器		なし	
じんめいせき 長岡城跡	遺物包含地	近世	廻跡	近世陶磁器		なし	
じんめいせき 源氏城跡	遺物包含地	平安	なし	なし		なし	
じんめいせき 淨円寺山遺跡	遺物包含地	古文	なし	なし		なし	
じんめいせき 淨円寺山遺跡	遺物包含地	古代	なし	なし		なし	

令和2年度 長岡市内遺跡発掘調査報告書

令和3（2021）年3月31日 印刷

令和3（2021）年3月31日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 有限会社めぐみ工房